

第28回夏期福音特別集会 (3) (梅ヶ島)

天を裂きて降り給え

――イザヤ書第64章――

1981年8月22日

小池辰雄

存在即使命 太陽よりも凄い実在 デタラメな奴の中に本ものが来る キリストは空前絶後
 義と救 枯れ葉のごとく われらは泥塊 造り直し 天を相手とする 義・愛・心・信・贖・
 霊 宇宙を抱く御霊 祈り

【イザヤ64】

1 願くはなんじ天を裂きてくだり給え。なんじのみまえに山々ふるい動か
 んことを。2 火の柴をもやし火の水を沸かすがごとくして降りたまえ。かく
 て名をなんじの敵にあらわし、もろもろの国をなんじのみまえに戦慄かし
 めたまえ。3 汝われらが逆料あたわざる懼るべき事をおこない給いしときに
 降りたまえり。山々はその前にふるいうごけり。4 上古よりこのかた汝のほ
 か何なる神ありて俟望みたる者にかかる事をおこないしや。いまだ聴かず、
 いまだ耳にいらす、いまだ目にみしことなし。5 汝はよろこびて義をおこない、
 なんじの途にありてなんじを記念するものを迎えたもう。視よなんじ怒りた
 まえり。われらは罪をおかせり。かかる状なること既にひさし。我等いかで
 救わるるを得んや。6 我等はみな潔からざる物のごとなり、われらの義は
 ことごとく汚れたる衣のごとし。我等はみな木葉のごとく枯れ、われらのよ
 こしまは暴風のごとく我らを吹き去れり。7 なんじの名をよぶ者なく、みず
 から励みて汝によりする者なし。なんじ顔をおおいてわれらを顧みたまわ
 ず、われらが邪曲をもてわれらを消失せしめたまえり。
 8 されどエホバよ汝はわれらの父なり。われらは泥塊にしてなんじは陶工
 なり。我らは皆なんじの御手のわざなり。9 エホバよいたく怒りたまうなかれ、
 永くよこしまを記念したもうなかれ。願くは顧みたまえ、我等はみななんじ
 の民なり。10 汝のきよき諸邑は野となりシオンは野となりエルサレムは荒れ
 廃れたり。11 我らの先祖が汝を讃めたたえたる我等のきよき宮は火にやかれ、
 我等のしたいたる処はことごとく荒れはたり。12 エホバよこれらの事あれ
 ども汝なおみずから制えたもうや。なんじなお黙してわれらに深くくるし
 みを受けしめたもうや。



●存在即使命

ベートーベンが、

「今はまことに感激のない時代である」

と嘆いた。こないだ亡くなったティリッヒは、

「現代は深みの次元のない時代になってしまった」

と言った。本当に生きた人はみな嘆いている。内村鑑三先生は、

「こんな国にはもう愛想をつかしたと言ってくれ」

と。藤井武先生は、

「日本よ、滅びよ」

と言った。このキリストの原始の、キリスト道にふれたあなた方は内村鑑三、藤井武の悲願に応えて前進する使命がある。私は藤井先生の屍を乗り越えて進んでいる。どうぞ、あなた方も、

「神のためには狂えるなり」

とパウロが言ったが、そういう気合で進んでください。私は安息日を40年間死守してきた。藤井先生に学んでいたときも、先生が仆れるまで私は一回も休まなかった。冗談を言っていたいいよ、しかし、魂の姿勢はそういうことです。日曜は戦いの日なんです。この第3回集会は煉獄的な集会です。明日は天国的な集会になります。

ベートーベンの言葉の中で私が一番好きな言葉を紹介します。彼の手紙の一部です。彼は聾になってしまった。音楽家が、作曲家が聾になった。彼は非常に絶望的な状態になって、ドナウ河に身を投じようとした。『ハイリゲンシュタットの遺言状』を書いて自殺しようと思った。けれども、彼は思いとどまりました、

「しかし、自分は音楽をもつて悩める者、苦しめる者の友となろう」

と。それからの彼の作曲には質が変わってきた。素晴らしいものはみなそれから後ののはなしです。ミルトンも失明しました。彼は大学を卒業して5年間ものすごく勉強した。ギリシヤ、ラテンの古典を読み尽くした。『パラダイス・ロスト』（失樂園）の詩の中にはそういったものが豊富に含まれています。あまり眼を酷使したから、眼が見えなくなつた。3人の娘さんたちに口述してあの『パラダイス・ロスト』を書いた。大変なもんです。

「まことに苛酷な宿命が私を打った。だが私は運命の意志に自らをゆだね、神に常になだ懇願する、私がなおこの地上でこの生に於て死の苦しみ耐えねばならない限り欠乏から守られるように、神がその神意を動かしてくださいることを。然らばこのことは、私の宿命がどんなに苛酷であり、おぞましくあろうとも、至高者の意志にゆだねて宿命に耐えるだけの力を私に与えるであらう。」

こういう句です。彼は

「ただ一つのクンスト（芸術）、音楽」



に身を捧げた。グリルパルツェルがベートーベン記念碑除幕式に際して演説した有名な句がある。

「この石碑は、丁度彼自身が在りし日にそうであつたように簡素であり、大きくない。これが大きければ大きい程、それはこの人の偉大さに対していよいよ逆に笑うべき距離をつくることになる。碑はただベートーベンという名のみが記されてある。……ここに横たわれる人は靈感ゆたけき人であつた！ 唯だ一つを追求し、唯だ一つの為に耐え忍び、一切を唯一のために投げ棄てながらこの人は生涯を貫いた。妻なく、子なく、喜びも殆どなく、楽しみも乏しく、一方の眼が彼を躓かせれば、これを摘抉するといった気魄で彼は目的に向かつて邁進したのであつた。」

彼にとって

「唯だ一つの」と

とは音楽であつた。

私たちの人生は、誰でもが何か課題を担っている。存在は即、使命である。それが人の目にはどんなにつまらなそうに見えても、神さまの目からは大事な使命がある。そのために自分を打ち込んでいく。打ち込むところの力は上からくる。そうすると、使命を果たすことは神の栄光が現れることになる。これが人生の意味であり目的である。そうでなかったら、つまらない。

「空の空なるかな、すべて空なり。日の下に新しきものなし」

という。しかし、日の下にただ一つの新しきものが来た。ナザレのイエス・キリストというひとが、驚くべきものが現れた。

「キリスト教」

なんていう言い方をするから、そもそも間違つてしまう。キリストの教えなんて言うから、皆くたびれてしまう。そして、偽善者になる。イエス自身は「キリスト教」なんて仰らない。

「喜びの音信」
おとずれ

と言つた。

「心の大転換をして、この喜びの音信を受けろ」

と。キリスト自身が喜びの音信なんです。キリストという喜びの音信です。キリストというかたは、驚くべき人と言おうか、神と言おうか、何と言おうか、分からない。まあ、本当に大変なひとが現れたものだ。私は

「キリスト！」

と言つて冥想していると何も言えなくなつてしまう。

●太陽よりも凄い実在

では、イザヤ書64章に入りましょう。



「願くはなんじ天を裂きてくだり給え。なんじのみまえに山々ふるい動か
んことを。」

こういう言葉はいわゆる思想ではない。「大思想全集」にはイザヤは出てこない。神さまに
向かって、

「天を裂きてくだり給え」

と叫んでいる。ユダヤ人というのは霊の世界を非常に具体的につかまえている。

「さて、神は？」

なんて、そんなことは思わない。太陽がそこに光っているよりもつと凄実在を相手に
してものを言っている。全身でもって叫んでいる。この霊的な実在に対して、「天を裂きて
くだりたまえ」と言っているイザヤは霊的なんです。彼自身の魂はこの陽を見ているから、
そこに厚い雲があっても、そんなものはぶち裂いて降って来てくださいと。ロングフェロ
ーが、

「雲の彼方にはそれでもなお太陽は輝いている。人生では、ある日は暗かったり、もの
憂かったりするが、しかし雲の彼方にはいつも太陽は照っている」

悲観するな、一喜一憂するなというわけです。

裂かない前に見えているわけです。

「どうぞ、露あられに現れてください」

と。ところが、天を裂いてくだって私たちの間に来てくださったのがナザレのイエスです。
降臨した。降臨というより降臨と言った方がいい。

「神さま、帰ってきてください」

というのは「くだりたまえ」ということです。

「汝らの呼ばざるさきに我は答える」

とある。「降りたまえ」と叫ぶと、どちらが速いかというくらいに、霊なる神は雲をつん裂
いてやってくる。「降りたまえ」と祈った瞬間に、彼は聖霊に触れてしまう。いいですか、
そのような叫びですよ。バーツと来てしまっているんです。電光石火、間髪をいれずという、
そういう現実です。こういう句にぶつかると、私はもうたまらんです。

「イザヤは叫んだけれども、神は果たしてくだって来たのだろうか」

なんて、そんな呑気なことを考えている世界ではない。呼ばざる先に答えている。イザヤ
の叫びの中の胸中の叫びを、それがまだ口に発しない前に、神さまは見て答えている。

●デタラメな奴の中に本ものが来る

この頃、私はいろいろな人の身体の悪い所にちよつと手を按くと、パツと治ってしまう
から、どうしたんだろうと思う。キリストが燃えてしょうがない。

聖書の人物の現実、霊によって動かされている現実なんです。考えられたり、研究さ



れたりするような世界ではない。

「我思う故に我あり」

なんて、デカルトは呑気なことを言っているよ。いかなる哲学も人ひとりの魂を救うことができません。いかなる学問も、いかなる芸術も、いかなる事業も人の魂を救えない。魂を救うものは、聖書に啓示されているところのこの霊の現実だけなんです。嘘か本当か、自分で当たってみたらいい。魂の世界は絶対にごまかしがきかないから。自分にいい聞かせようが、人に弁解しようがどうにもならん、自分自身が本ものになるまでは。

「本もの」

とは何ですか。私は本ものではないですよ、私の中に来ているものが本ものなんです。私自身は本ものでも何でもありません。私はデタメ、ウナ奴だ。

「このデタメな奴の中に本ものが来るから、ありがたくてしょうがないというだけの話です。」

「そうですか、先生はそんなにデタメな人ですか。それでは、もう辞めます」

なんて、ああ、どうぞ止してください。私はそこの牧師さんみたいに、会員なんかひとつも惜しんでいませんから。

「何が何でも、先生を背負ってでも私は行きます」

という人と私は一緒に行きます。

「先生が躓いた転んだ。それではやめます」

なんて言う人は、いいから、どうぞ出て行ってください。私は躓いたり転んだりするから。けれども、前進してやまない奴なんです。乱暴な言い方をしなければしょうがない。

人間というやつはどうにもならん。20世紀もどうにもならん。だから、私の讃美歌には激しい言葉が随分出てくる。呻き叫んでいる。仕方がない。聖書の現実はそのような生易しいことではない。しかし、その中に投じてみれば、なんと素晴らしい、光輝く世界かと。歓喜と、また本当に優しい、いろいろな素晴らしいものがこの中に含まれている。聖書はもう、たまらんです。聖書自身はドラマです。その中にゴミもあるし、ドロもあるし、ダイヤモンドも光っている。その中のダイヤモンドを見ていかなかったらダメです。

「願くはなんじ天を裂きてくだり給え」

と叫んだ時に同時にくだっているとこの霊なるエホバに接しなければいかん。そうすると、祈りが讃美になる。「くだりたまえ」ではなく、

「くだりたまえり」

なんです。

「なんじ天を裂きてくだり給えり。アーメン」

ということ。光が貫かれていたと。願いが完了の讃美となる。そういう読み方をしていかなかったら、この聖書というのはダメなんです。



●キリストは空前絶後

1 願くはなんじ天を裂きてくだり給え。なんじのみまえに山々ふるい動かんことを。

凄^ひいね。これは地震ではない。天震^{てんしん}です。

2 火の柴をもやし火の水を沸かすがごとくして降りたまえ。かくて名をなんじの敵にあらわし、もろもろの国をなんじのみまえに戦慄^{せんりつ}かしたまえ。

地上のものはみな振るわれてしまえ、あなたのご臨在はそのような震撼するようなものだ。

3 汝^なわれらが逆料^{はかり}あたわざる懼^{おそ}るべき事をおこない給いしときに降りたまえり。山々はその前^{みまえ}にふるいうごけり。

これは詩篇46篇と相通ずるようなところだ。

4 上古^{いにしえ}よりこのかた汝のほかに何なる神ありて俟望^{まち}みたる者にかかる事をおこないしや。

素晴らしいね。「汝のほかに何なる神ありて」と、

「本当にあなただけが神さまだ、他の神々なんてのはあれども無きがごときものだ」と。「俟望^{まち}む」という言葉は旧約にたくさん出てきます。

「信賴する」

という字です。信賴するとは自分を全托すること。

「汝に全托する者」

ということだ。

いまだ聴かず、いまだ耳にいらす、いまだ目にみしことなし。

これはコリント前書2章に引用されています。

「録して『神のおのれを愛する者のために備え給いし事は、眼いまだ見ず、耳いまだ聞かず、人の心いまだ思わざりし所なり』とあるが如し。」(コリント前2:9)

「眼いまだ見ず、耳いまだ聞かず、人の心いまだ思わざりし所」

のただ一つの事態は、イエス・キリストという事態です。これは前にも後にもない。キリストというひとは空前絶後です。福音書というのは空前絶後のことが書かれているところの書物です。

福音書を聖書から破り取ってポケットに入れておきなさいよ。イザヤ書だとか詩篇だとか福音書だとか黙示録だとかを。そういうことを楽しいと思わないですか。私は聖書をいくつ持っているか知らない。あちらこちらに置いてある。そして読んではラインを引く。私は大体、ラインを引きたくないような本は読まない。

誰がイエスの言葉のような言葉を聞きましたか。耳にいまだ響いたことのない彼の言葉、



目に見たことのないようなこの人物。二千年向こうの星から大望遠鏡で観ると、キリストが見えるよ、二千年の向こう側には行くわけにはいけないけれども。私は驚くべき詩を書くからね。私は冥想しだすと大変なことになる。

キリストを見ない前に、もうイザヤ書はどのような神の顕現に対して驚嘆しているわけです、いかなる神がこのようなことを顕すかと。

●義と救

5 汝はよろこびて義をおこない、なんじの途にありてなんじを記念するものを迎えたもう。視よなんじ怒りたまえり。われらは罪をおかせり。かかる^{さま}なること既にひさし。我等いかで救わるるを得んや。

喜んでいるかと思うと、またこんなことを言います。

「汝はよろこびて義をおこない」

とある。これは福音の義に非常に通じているところの「義」です。その「よろこびて行われる」ところの義を受けとれば、救いになるのに、今度は

「我等いかで救わるるを得んや」

と嘆いている。「義」と「救」という言葉がここでもちゃんとシノニム(同義語)に使っている。「義」という言葉が欲びにならないうちはウソですよ。神さまの御意がそこにおいて成っている世界を「義」という。御意が実現されている世界、聖意が体现されている世界です。

前の集会で、中国のコブのある娘の話をしたね。あれはお父さんお母さんの言うことを体现していた。王様を相手に勝ってしまった。それで、王様はこれを自分の妃にした。あの娘は本当の義を行じた娘です。父母を敬うところでない。父母に本当に従っている。

私の兄貴は信仰に入ってから、お母さんの言うことを

「はいっ」

と言って必ず実行していました。本当に素晴らしい姿でした。一言も口答えをしません。

それがこの「義」なんです。これを完全に喜んで成就したひとがキリストなんですから。この義は本当に喜ばしき義です。キリストは神さまの言うことを仕方なしに従っていたのではない。喜んで従っていた。これは服従ではない。信頼して信従している。信じ従っている。

相手は「父」という絶対者ですから、キリストはそれを全面的に全的に肯定して、自分なんか問題にしていらない。そうしたら、神さまがグーツと入ってきた、その言葉もその力もその光もその愛も。だから、

「我を見し者は父を見しなり」

と言われた。これが本当の義人となった。その義というのものはもの凄い素晴らしい内容をも



ったものです。だから、「義とする」というのは、

「この義を与える」

ということ。観念的に「義とする」なんて言ったって始まらない。あの、

「信仰によつて義とされる」

という言葉は躓きになる。

「信ずることによつて義が与えられる」

と言った方がいい。キリストという義が与えられる。そうしたら、具体的な世界だから、これはたまらんです。本当ですよ、楽しいことなんです。義が与えられる。そのような喜ばしき義は、その与えられている事態は、同時に愛であるわけです。イザヤはその義と救いをいつも同じように並べて語っている。これを受けとらないと、この義が今度は審く義になってしまふ。義を受けとらないことによつて、その人は審かれてしまふ。恵みの反面は審判になってしまふ。恵みを受けそこなうことは、自らを審いてしまふことだ。キリストに來ないで、どこへ行こうとしているんですかね。

私の話を聞きながら、皆さんはその現実にグーッと入ってきているでしょうね。

「先生は何を言おうとしているのだろうか？」

なんて、そうじゃないよ。本当は私が言うよりか先に入ってもらいたい。

「先生が語らざる先に我は聞けり」

なんて。それなら楽だよ、こっちは。私は藤井先生の所へ行つたときに、自分が先に思っていることをよく先生は言っているんだ。

「どうしてこんなに似てしまつたんだろうか。自分が発見したと思つたら、先生が言うから、おもしろくないな」

なんてなことを感じたこともあるくらいです。

● 枯れ葉のごとく

6 我等はみな潔からざる物のごとくなり、われらの義はことごとく汚れたる衣のごとし。我等はみな木葉のごとく枯れ、われらのよこしまは暴風のごとく我らを吹き去れり。7 なんじの名をよぶ者なく、みずから励みて汝によりする者なし。なんじ顔をおおいてわれらを顧みたまわず、われらが邪曲をもてわれらを消失せしめたまえり。

我々の義なんてものは「枯れ葉」のようだと面白い言い方をしている。人間の義なんていうものは、正義だとか何とか言っているけれども、枯れ葉みたいなものだ。青々としてゐる葉ではなく「枯れ葉」だと。キリストの義は青々としているのだけれども、我々の枯れ葉で、そんなものは吹き飛ばされる。一茶の句に、

「焚くほどに吹き寄する枯れ葉かな」



とある。ちょうど枯れ葉が吹かれて集まってきたから、これで火を焚いてすこし暖まろうかと、それ位のものだ、枯れ葉なんてものは。

私たちの、いわゆる人間の側のものは全部、問題にならない。我々の義は枯れ葉の如し。高が知れている。五十歩百歩だ。

「どうだこうだ」

なんて言ったつてはじまらない。人間の立派さなんてものは問題にならない。だから、

「大道廃れて仁義あり」

なんて老子が言うんだ。この大道がすたれてしまったから、仁だの義だの言っているが、仁義はまだ少し次元の低い世界だと。あの場合の仁義はこの義とは違いますけれども。老子というのはでつかいやつだ。

「道德のことを一生懸命で言っているのはまだダメなんだ、本当の大道というものはそれを超えた世界だ、無道の道だ」

と。老子のあの無は素晴らしい。孔子は老子に驚いて、

「老子は竜の如くで、いずこに天に昇ってしまうか分からないやつだ」

と言ったという。

大自然のような人物にならなければダメですよ、男でも女でも。せせらぎの如く、嵐の如く、無風のごとく。嵐また楽しからずやと。いろいろな事情もありましょうけれども、事情は事情ですけども、もうひとつ乗り越えた境地をいつも持たなければダメです、行き詰まるところを知らざる魂にならなければ。私はどうしてこんなことになってしまったかと、自分で不思議でしょうがない。

「小池先生は怪物だ」

と言う。怪物かもしれない。

自分の側を枯れ葉のごとく思つて、問題にしない。

「生命の樹は緑である」

とゲーテも言っているとおり、キリストの生き生きとした常緑の樹は枯れない。

●われらは泥塊

8 されどエホバよ汝はわれらの父なり。われらは泥塊^{つちくれ}にしてなんじは陶工^{すえつくり}なり。我らは皆なんじの御手のわざなり。

「私たちの側はこんなわけですが、御前に出られないようなやつですが、しかし、あなたはお父さんです。どんなことがあっても、私はあなたにしがみつきます。また、どんなことがあっても、あなたは私を棄てません」

と、こういう非常にドラマチックな言葉は、これは本当です。

「我は汝を棄てず、忘れず」



と、イザヤ書のもう少し前の方で言っている。

「ヤコブよイスラエルよ此等のことを心にとめよ。汝はわが僕なり、我なんじを造れり、なんじわが僕なり、イスラエルよ我はなんじを忘れじ。我なんじの愆を雲のごとく消し、なんじの罪を霧のごとくにちらせり。なんじ我にかえれ、我なんじを贖いたればなり。」(イザヤ44・21〜22)

「もう贖ってしまったから、帰っておいで」

ということだ、

「帰ってきたら、贖うよ」

ではない。私はこのところが大好きだ。楽しくてしょうがない。

ブラウニングの「ラビ・ベン・エズラ」の詩を思い出します。

Thoughts hardly to be packed

Into a narrow act,

Fancies that broke through language and escaped;

All I could never be,

All, men ignored in me,

This, I was worth to God, whose wheel the pitcher shaped.

狭苦しき行為の中に

包み込み得ざる思想

言葉をはみだし破って逃げいく想像

私が望めどもなり得ざりし一切

私の中にあるのに人々が無視したすべて

これぞ神に対する私の価値である。

神のろくろはこの壺を造ったのだ。

素晴らしい句だね。

「自分は神さまのろくろでグルグル回されて造られたところの壺みたいなものだが、それらのことが神さまに対して価値あるゆえんであった。神さまは運命でもって私をグルグル回しながら造っていらつしやる。その私はもの凄い空想ともの凄い創造的な思想をいただいているが、それはとても行為に出し切れない。人にはバカにされる。これが価値あるゆえんだ」

と。愉快な言葉だね。

「神の手にあって自分たちは造られたものである」

ということはエレミヤ18章にある。

「エホバよりエレミヤにのぞめる言いう。汝^た起ちて陶人^{すえものし}の屋^{いえ}にくだれ。我かしこに於てわが言を汝に聞かしめんと。われすなわち陶人の屋にくだり視る



に輾轡^{ろくろ}をもて物をつくりおりしが、その泥^{つち}をもて造れるところの器、陶人の
手のうちに傷^やねたれば、彼その心のままに之をして別の器^{ほか}をつくれり。」(エ
レミヤ18・1-5)

私たちは神さまによって、でき損ないを今度は別のものに造つてくださる。聖霊をいただ
くと、別な器にされる。

「人新たに生まれずば」

とは、

「人別な器に成らざれば」

ということです。せつかく神さまが造ろうとするのに、でき損ないができてしまったから、
神さまはそれでもつて別な器にしてしまう。

8 されどエホバよ汝はわれらの父なり。われらは泥塊^{つちくれ}にしてなんじは陶工^{すえつくり}
なり。我らは皆なんじの御手のわざなり。

ちようどエレミヤと相通ずるところのことが書いてある。神さまはどしどし新たに我々
を創造してくださる。

●造り直し

9 エホバよいたく怒りたもうなかれ、永くよこしまを記念したもうなかれ。

願くは顧みたまえ、我等はみななんじの民なり。

我々は汝の子であり、汝の「民」――ギリシヤ語では「ラオス」という――である。汝
の僕である。テモテ前書に、

『キリスト・イエス罪人^{つみびと}を救わんために世に来り給えり』とは、信^{まこと}ずべく正^{ただ}
しく受くべき言なり、其の罪人の中にて我は首^{かしら}なり。』(テモテ前1・15)

とある。パウロは始めは本当にでき損ないだった。キリストは罪びとを、でき損ないを、
救わんために世にいらつしやつた。

「我は罪人^{つみびと}の首^{かしら}なり」

我はでき損ないのかしらだという。我執の人間の、自我の強い人間のかしらだという。

「一番私は自我の強い、しょうがないやつです、その自我がひっくり返されました」

と。聖霊でぶつ倒された。自我が聖霊でぶつ倒されて、それで今度は冥想していたら、十
字架が現れた。パウロは、聖霊でもつてぶつ倒されたら、今度は十字架がその中に現れた。

「あのキリストの十字架は根底から私を救ってくださった」
ということになった。

「我れキリストと共に十字架せられたり、もはや生くるにあらず。キリスト――

――御霊のキリスト、キリストの御霊――がわがうちにあり」

と。皆さん、もう聖霊の世界に入っているでしょうね。



「明日の最後の集会で入りたいと思つてます」

なんてダメだよ、今、その世界に入らないと。

人は神さまに造られたものでしょ――創世記1章27節――神の「似姿」につくられている。神と同質に同形に造られている。霊が止ま^{とど}まっているのが霊止である。本来、神の霊の止まっているように造られているから、無意識的に実は神を慕っているのだけれども、それからはずれてしまった。それがパラダイス・ロスト(楽園喪失)です。

「私たちは枯れ葉のごとき見栄えのない、どうしようもないものですが、このでき損ないを造りなおしてください。天から降つて、その御霊の力と智慧をもつて、光をもつて、愛をもつて、造り直してください」

と言っているわけです。天から降^{くだ}つて私たちの造り直しをしてくださったのが、このイエス・キリストです。けれども、天から降つて、キリストはいきなり造り直しをなさらなかった。ペテロもヨハネもヤコブも、地上のキリストはこれを造り直しなさらなかった。

パウロが

「我は罪びとの首なり」

と言つた、その罪を、自我というやつを完全に吹き飛ばしてしまったのが、枯れ葉みたいなやつを吹き飛ばしてしまったのが、この十字架なんです。贖い飛ばしてしまった。それだから今度は、聖霊を降して、内側は別人の如くにしてしまう。聖霊が来たら、これは誰が何と言つたつてしょうがない。

「聖霊が来たんですけれども、まだ私はこんなで」

なんて、なぜそんなことを言うんですか。聖霊が来たら、聖人になるんですか。ローマ書7章の、

「噫われ悩める人なるかな、此の死の体^{からだ}より我を救わん者は誰ぞ。我らの主

イエス・キリストに頼りて神に感謝す……」(ローマ7・24、25)

これは、救われたパウロが旧き我を見て、旧きまだ完全に拭い去られていない我をみて、神に叫んでいる。人間はそういう劇的な矛盾構造になっている。

けれども、もはや恐れることはない。この御霊は必ず勝つていらつしやっている。十字架と御霊に救われているから、どんなことがあつても、私は滅びない。

「それは要りません」

なんて言つたら、滅びますよ。「要りません」とは言わせないんです。御霊の世界から抜けたら、本当の意味で私はぶつ倒れてしまうからね、そして、明日にも死んでしまうでしょうね。

●天を相手とする

祈りの世界に入ると、睡眠時間なんかそう問題でなくなる。



「私は夜型で朝寝坊だ」

と表向き言っているが、私はそんなに朝寝坊でもない。いつでも起きるし、いつでも寝れる。自由自在です。これはしょうがないやつですね。電車の中でもどこでも眠ろうと思えばすぐ眠れる。

西郷南洲は天を相手にして、人なんか相手にしてないから、大きな人物だった。あの頃は、少し時勢を越えた思想をもっていると危ない、殺されそうになる。刺客に狙われる。南洲もまたその一人だった。ある三人の武士が勝海舟に

「あの南洲をやつづけたいが、南洲に会えるよう紹介状を書いてください」

と、頼みにきた。また、海舟も海舟だ、紹介状にちゃんと

「あんたを殺そうとするやつらが来るから……」

と書いて、これを持って行けというわけだ。夏のある日、南洲は玄関の所で裸になって昼寝していた。そこへその三人がやってきて、

「南洲先生にお目にかかりたいと思ってやって参りました。紹介状をもっております」

と。南洲は

「南洲はわいどんじゃ」

と、裸のままで奥座敷に連れていった。紹介状をみると、

「この三人の者この度、足下を刺さんとしてその地に参ずる者である。幸いにご面談の上よろしく」

と書いてあった。海舟も海舟だね、南洲という人物を知っているから。

「お前たちは俺を殺そうとしてやってきたな」

と、平然として言ったものだから、三人はびっくりしてこそそと逃げてしまった。

私たちも本当に永遠の生命をもっていれば、このような生死を越えてしまっているところの、天を相手としている人物に、南洲のような太い魂になれるわけです。神さまは私に使命がある限り、南洲や海舟を守ってくださったように、守ってくださいます。福音でもって立っていれば、どうしても風当たりは強い。先頭を切って行くから。しかし、このキリストの守りは金城鉄壁どころではない、無刃流の無手勝流です。

「神は凡ての人の救われて、真理を悟るに至らんことを欲し給う。それ神は唯

一なり、また神と人との間の中保も唯一にして、人なるキリスト・イエスは

なり。」(テモテ前2:4-5)

「悟る」とは「エヒグノース」という字からきている字で、本当に靈智することです。キリストという真理を本当に知る。「知る」とは頭ではない、全存在をもつて本当に受けとることを「知る」という。



●義・愛・心・信・贖・霊

預言者の特徴は、アモスの義、ホセアの愛、エレミヤの心、第一イザヤの信、第二イザヤの贖い、第三イザヤの霊ということです。

神の愛がホセアに現れて、

「どんなにそれがダメなやつでも必ずそれを愛しぬけ。お前はこれを棄てるな」と示された。姦淫の妻を買い戻して、

「私もお前に対して決して悪いことをしないで、これを顧みてやれ」

と、そういうことをホセアは体験を通して示された。

また、エレミヤ31章には、

「エホバいいたもう、みよ我イスラエルの家とユダの家とに新しき契約を立つる日きたらん。この契約は我が彼らの先祖の手をとりてエジプトの地よりこれを導きいだせし日に立てし所の如きにあらず、

あの「モーセの十誡」のことです。

我かれらを娶りたれども彼らはその我が契約を破れりと、エホバいいたもう。

即ち、夫が妻を愛するように愛したのだけれども、律法を破つて不信であつてダメだと。

然どかの日の後に我イスラエルうちの家に立てんところの契約は此なり。即ちわれ我が律法をかれらの衷うちにおき、その心の上に録しるさん。我は彼らの神となり、彼らは我が民となるべしとエホバいいたもう。」(エレミヤ31・31〜33)

とある。

「汝はわが民であり、我は汝らの神である」

という契約です。エレミヤを心の預言者といったのはそのことなんです。

「心の上に置きたるところの契約」

とは内的な律法であるということです。エレミヤは本当にハートの預言者です。

「人の心腸を見たもうエホバよ」

と言つて、非常に暖かい涙の預言者です。藤井先生もエレミヤが大好きだった。

第一イザヤが

「信仰とは何ぞや」

と聞かれて、アッシリヤの大軍が来たときに王様に対して、

「エホバに対する信を貫け」

と言つた。このイザヤの信によつて、疫病か何かで、一夜にしてアッシリヤの大軍はやつつけられた。これが信の世界です。

第二イザヤは正に、イザヤ書53章のエホバの僕の歌がいうところの贖いの音信をもつてきた。また、イザヤ書59章には、

「エホバのたまわく、贖者あがなうものシオンにきたりヤコブのなかの愆とがをはなるる者に



つかんと。エホバいい給わく、なんじの上にあるわが霊、なんじの口におきたるわがことばは、今よりのち永遠になんじの口よりなんじの裔の口より汝のすえの裔の口よりはなれざるべし。わがかれらにたつる契約はこれなりと。此はエホバのみことばなり。」(イザヤ59・20、21)

とある。第三イザヤは、霊の契約です。

「霊をお前の上に置くぞ」

と。「霊と言」とある。それは霊言であり、言霊ことだまであるわけです。

「わが言は霊なり生命なり」

の方です。御霊が臨んでくるわけです。第三イザヤでは、この御霊の世界が強い。

これが全部、キリストに注ぐところの支流なんです。預言者たちという河の流れがキリストというガリラヤ湖に注ぎ込むわけです。これを全部、キリストはもっている。全部これを成就した。イエスという人物において、日の下に新しきことが起きた。

「未だ聞かざりし未だ見ざりしところの、つらつら手に触りしところの言」ことば

という。大変なひとです。全預言を彼は受けとって、それ以上の人物である。もう何とも言えない。

●宇宙を抱く御霊

だから、

「南無キリスト!」

と言えば、もうその中に自分が投げ込まれてしまつて、聖霊の世界に入つてしまふ。

「聖霊とは何ですか?」

なんて、対象的に考える必要はひとつもない。贖いとられ、ぶつ倒され、造り変えられ、新創造され、新たに生まれさせられる。

義、愛、心、信、贖い、霊ということが、それぞれの預言者の存在をもつて啓示されてきて、全部キリストの中に入つてしまった。

「律法と預言者は我を証しするものである」

というのがそのことです。

「モーセの律法」

というのがある。法というのは本当は素晴らしい言葉です。水が低きに流れ去ることを法という。物理法則からきている。そのように自然なんです。神の天然自然の姿を「法」という。自然法あり、道徳法あり、また霊法あり。全部、法の世界です。その法の世界に乗つかつてしまうことが本当の自由である。法からずれて、それを自由なんていうのは、とんでもないはなしだ。それは不自由なんだ、自我に捕らわれている。神さまのつくった法の中に入れば、これは本当に自由です。



モーセという法は実は隠れた福音であつた。これはモーセからこの預言者たちにずーっと続いている。まだ、エリヤ、エリシャというのがいるけれども。おもしろいですよ、旧約はキリストに集まっている。

エレミヤには、

「律法は石ではなくその心の中に録されたものである」

という。それを本当に受けとれば、そのハートの響きでもって、

「お前は私の民だ、私はお前の神だ」

と。そして、その「私は霊である」という。心の世界は霊的人格の世界です。

「我は偶像にならない」

という、モーセの十言の第一言、

「汝はわが顔の前にいかなる偶像をも己の為に造ってはならない。わが顔の前

にいかなる神々も汝にとつては神にあらず。私だけが神である」

というのが、これが心の世界です。これが渾然^{こんぜん}として入ってくる。キリストは宇宙的な人物だからです。

「キリストは宇宙を抱く^{いだ}御霊かな」

これは私の句です。宇宙を抱けるものはキリストの他にいない。私はどこへ行つたって大胆に証します、自分ではないから。キリストは小さな、いろいろな諸々の宗教の中の一つの宗教ではない。一切を包摂しているから。これはちよつと分からないね。

「小池先生は少し気が違つたのではないか」

なんて。気が違つたよ、普通よりは。別な気になつてしまった。けれども、これが一切の認識の根源です。私はもし二百年でも三百年でも生きれば、いろいろな勉強をしたい。植物学でも動物学でも天文学でも。もの凄い知識欲をもっています。

空気に私たちが包まれている以上に、私たちはこのような驚くべき宇宙的なキリストに包まれ、キリストに担われ、キリストに貫かれているんです。

皆さんの魂もそれに向かつて結集しつゝあります。人間的なこだわりは一つもない。そんなものはぶつ飛んでしまう。祈りの世界ではキリストだけです。

「汝はわが骨の骨、わが肉の肉」

とキリストはあなた方に言つておられる。

「あなたはわが骨の骨、肉の肉です」

とこちらから応える。そのような霊的な具体的な現実なんです。もの凄い永遠の生命が脈々として流れている、キリストの血が流れる。

「我に居れ、我に宿れ」

とキリストはヨハネ伝15章で仰つた。

「はいっ！ その通りです」



というより他はない。

● 祈り

私が先に祈ります。

聖書一卷になお溢れて仕方がないところの、驚くべき実在であり給うところの主さま。宇宙を抱き給うところの驚くべき実在者、主さま。この第一、第二、第三イザヤを通して、イエス・キリストに貫かれ、預言者達は全部キリストに流れ込みました。主さま、あなたは旧約聖書のことを

「我につきて証するなり」 あかし

と仰いました。そのような事態の一端を今晚承り感謝いたします。私たちは枯れ葉のごとき存在です、でき損ないの器です。しかしながら、あなたはこれを緑の葉に直し、これを新しき別な器に造り変えてくださる。あなたの十字架の贖いの故に、あなたの御霊の降臨の故に感謝いたします。空気が私たちの肉体を包みまた貫いて、またこれを生き生きとした血にしてくれるように、それよりもはるかに素晴らしく、あなたの聖霊は私たちを包み、私たちを貫き、私たちの中に脈々と生きてくださる。感謝いたします。

そのようにして天を裂きて降り給いて、私たちに浸透してくださり、感謝いたします。この恵みの絶対恩寵の現実を感謝いたします。ここに集まっている兄弟姉妹たちは、今を一刻千金として、一分は百分でもあり、一夜が千夜でもあり、驚くべき質をもった今晚を感謝いたします。私たちはあなたの天国的なパラダイスに今あります。この相対的現実がすでに驚くべき絶対現実でありました。ありがとうございます。皆の中に本当に歓びが溢れ、歓喜の油が本当にみなぎって、私たちが大歓喜であることを今ひしひしと感じ、ハレルヤ、御名を讃え奉ります。

この兄弟姉妹たちは、かくして、本当にあなたの救いにあずかり、汝の義は、汝の愛は……

私たちの贖主キリストさま、かくも梅ヶ島の祈りの会を、あなたが私たちの願い以上に聞いてくださり、一人ひとりに御霊をもつて臨んでくださり、ありがとうございます。深き力強い平安の中に入れられ、ありがとうございます。

御名によりて、霊の動きより解かれよ、平安のうちに解かれよ。霊の祈りより心の中に入っていきます。この第三イザヤとエレミヤの消息の中に入って、ありがとうございます。キリストの御名により感謝し奉る。アーメン！

